

神戸学院大学人文学会 2014 年度事業

地域連携によるアクティブラーニング授業の実践的研究

明石ハウスを拠点とした 調査・研究の継続、維持のための活動 研究成果報告書

〈地域研究センター明石班〉

神戸学院大学地域研究センター

CENTER FOR AREA RESEARCH AND DEVELOPMENT
KOBE GAKUIN UNIVERSITY

CARD



Akashi

緒言

神戸学院大学地域研究センターは、学術フロンティア推進事業「阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究」を推進するために2002年度に設置された。この事業は2009年度まで継続し、「地域と共生する大学」を念頭に、心理学や地震・防災学などの8つの専門研究分野が地域の抱える問題に取り組み、大学と地域との信頼関係と協力関係を構築することをめざして、多くの成果をあげたが、地域研究のさらなる深化の重要性・必要性が明らかとなった。この事業を継続発展させるために提案した地域研究プロジェクト「地域力再発見をめざす大学と地域との連携・協働による実践的研究」が、2011年度に文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された。この事業は2013年度まで続き、地域の人々とさまざまな形での協働研究を展開することによって、地域の人々とともに地域に内在するさまざまな力を掘り起こし、それを地域の資源として再構築して地域社会の活性化に貢献することを目指した。また、このような地域と大学の相互交流に基づいた大学の新たな研究スタイルと学びのモデルを創出するために、さまざまな活動を実施した。

本報告書は、上記のプロジェクトの成果を維持し発展させるために2014年度に実施した明石グループの活動をまとめたものである。これらの成果は、次の新しいプロジェクトへと引き継がれると確信している。

2015年3月

早木 仁成

神戸学院大学人文学部

目次

内容

目次	2
明石～垂水地域の海岸利用の現状と改善策 石井 翔太郎、鹿島 基彦	3
淡路島におけるアーティストのパフォーマンス的活動と地域活性化の関係 桑島 伸二.....	18
「越劇の理解と普及を通して新たな地域文化を創出するための研究」2014年度活動報告 中山 文	19
「記憶の中の明石」聞き取りプロジェクト 三田 牧	26
大蔵地域における写真撮影を活用したフィールドワーク 矢嶋 巖	30

明石～垂水地域の海岸利用の現状と改善策

石井 翔太郎、鹿島 基彦

1 はじめに

明石周辺の海岸地域は、人口密度が比較的高い割には水がきれいであり、同時に海峽地形のためにプランクトンの増殖力が高い傾向にある(生態系工学研究会、2009)。さらには、大都市圏内にあり、六甲山系が海岸まで迫る地域であるために海岸にアクセスしやすい。これらの条件がそろっているため、漁業関係者や釣り客、海水浴客などの多くの人でにぎわう地域である。このような背景を併せ持つものの、砂浜海岸として多くの海岸線が整備された。しかし、砂の流出を防ぐためにコンクリートや石の突堤が築かれ、あまり良い景観とは言い難い風景になってしまった。

当海岸地域のような高人口密度地域に適した海岸環境の理想像を提言することを目的として、明石市～垂水区の海岸地区にて月毎の海岸利用者数を調査・考察することで、この地域の海岸整備の改善策の提案を行う。

2 データと調査

2.1 海岸利用者数調査

2013年9月～2014年9月の最大13ヶ月間にわたり、毎月一回、原則第2日曜日に利用者数の調査を行った。そこにいた人はすべて利用者とした。調査地は、垂水漁港(堤防)、舞子海岸(堤防と砂浜)、大蔵海岸(堤防と砂浜)、明石港(堤防)、林崎漁港(堤防)、林崎海岸(砂浜)で、そのうち大蔵海岸と舞子公園は砂浜地区と堤防地区に分けて扱い、合計8地区として行った(図1)。大蔵海岸の砂浜地区には背後の緑地を含めた。アンケート結果から(鹿島ほか、2014)、遠方からの来客も多かったことを考慮して、調査は12～16時に行った。広範囲を短時間で行うため3名体制でなるべく同時に調査した。なお、それぞれの調査地の面積は大きく異なり、砂浜地区のほうが一か所当たりの面積は大きい傾向にある。

2.2 平磯海釣り公園入場者数

神戸市立平磯海釣り公園(図1)の2013年9月～2014年9月までの毎日の入場者数(神戸市立平磯海釣り公園、大前章一私信)を用いた。休園日は12月29日～1月3日を除く毎週火曜日、開園時間は4、11月6:00～18:00、5月平日6:00～18:00、土日祝6:00～19:30、6月平日6:00～18:00、土日祝6:00～20:00、7～9月平日6:00～19:00、土日祝6:00～20:00(7月21日～8月31日無休6:00～20:00)、10月6:00～19:00、12～3月7:00～17:00である。2月は施設点検のため5日間の連続休園日がある。



図1 東から★平磯海釣り公園、①垂水漁港、②舞子公園砂浜、③舞子公園堤防、④大蔵海岸砂浜、⑤大蔵海岸堤防、⑥明石港、⑦林崎漁港、⑧林崎海岸砂浜を示す。

2.3 魚種別漁釣果指標

海岸利用者数に大きく影響すると考えられる家族釣りなどでよく狙われるとされる魚種をアジ、イワシ、クロダイ、サバ、タチウオ、メバルの6種類とし、釣り情報誌や釣りホームページ（小西英人、2011；根魚塾、2008；季節別旬の魚と地域が分かるサイト、2014/12；ぼうずコンニャク、2014/12；太刀魚道場、2014/12）を参考に、期待される釣果を季節毎に10段階で数値化したものを魚種別釣果指標として作成し用いた（数値が大きいほど釣れる）。

3 海岸利用者数調査結果

- ① 垂水漁港では、11月に最多で、1月は半分以下、その後は7月まで増加した。
- ② 舞子公園砂浜では、7月が最多で、8月も多く、その後の9月からは半分以下に減少し、1月に最少だった。
- ③ 舞子公園堤防では、10月が最多で、11月もそこそこいたが、12月には半数以下に減少した。他の調査地では1月に最少になったが、ここでは3月に最少であった。
- ④ 大蔵海岸砂浜では、7月が最多で、8月には減少したが、9、10月は再び多くなった。11月に大きく減少し、1月に最少だった。
- ⑤ 大蔵海岸堤防では、10月に最多で、11月もそこそこいた。最少は1月だった。
- ⑥ 明石港では、9、10月に最多で、最少は1月で0人であった。
- ⑦ 林崎魚港では、9月に最多で、10、11月もそこそこいたが、12、1月は0人であった。
- ⑧ 林崎海岸砂浜では、7月が最多の1893人で、本調査ではとびぬけて多かった。しかし、6、9月は大蔵海岸砂浜の方が多かった。最少は1月であった。
- ⑨

表1 各調査地における海岸利用者数。空白は未調査、下線文字は曇り、黒字は晴を示す。

	①垂水 漁港	②舞子公 園砂浜	③舞子公 園堤防	④大蔵海 岸砂浜	⑤大蔵海 岸堤防	⑥明 石港	⑦林崎 漁港	⑧林崎海 岸砂浜	全平 均	堤防 平均	砂浜平 均
9/22						116	74	107	99	95	107
10/13		227	387	571	209	97	48	238	254	185	345
11/24	59	96	247	134	85	50	52	69	99	99	100
12/15	<u>46</u>	<u>53</u>	<u>94</u>	<u>32</u>	<u>9</u>	<u>21</u>	<u>0</u>	<u>62</u>	<u>40</u>	<u>34</u>	<u>49</u>
1/18	20	20	112	14	1	0	0	23	24	27	19
2/9	<u>22</u>	<u>59</u>	<u>107</u>	<u>99</u>	<u>17</u>	<u>13</u>	<u>7</u>	<u>113</u>	<u>55</u>	<u>33</u>	<u>90</u>
3/9	27	52	47	105	33	13	10	38	41	26	65
4/19	31	123	66	204	33	37	17	135	81	37	154
5/18	43	141	70	374	120	82	12	236	135	65	250
6/15	44	176	80	626	77	40	23	388	182	53	397
7/20	57	481	116	773	93	68	47	1893	441	76	1049
8/23	31	457	72	355	24	10	38	405	174	35	406
9/21	40	189	97	633	118	58	50	208	174	73	343



図2 枠は、右から①垂水漁港、②舞子公園砂浜、③舞子公園堤防を示す。

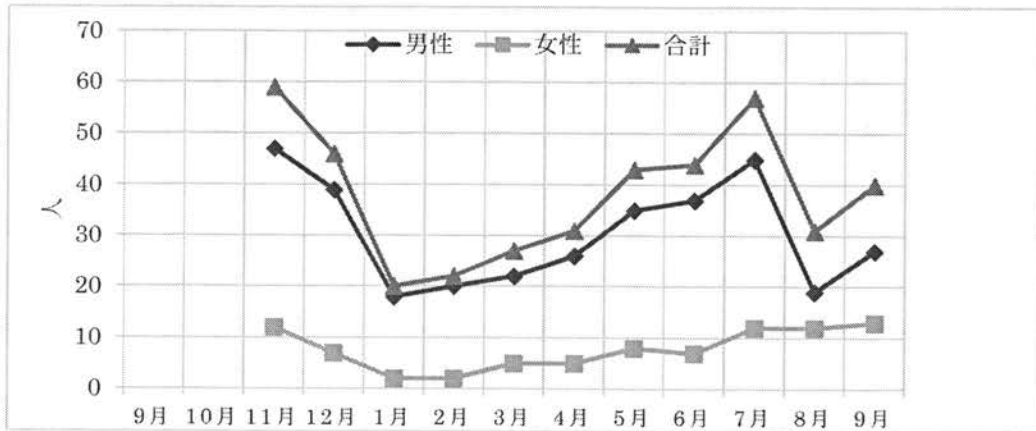


図3 (上) ①垂水漁港の利用者数と(下)その風景。

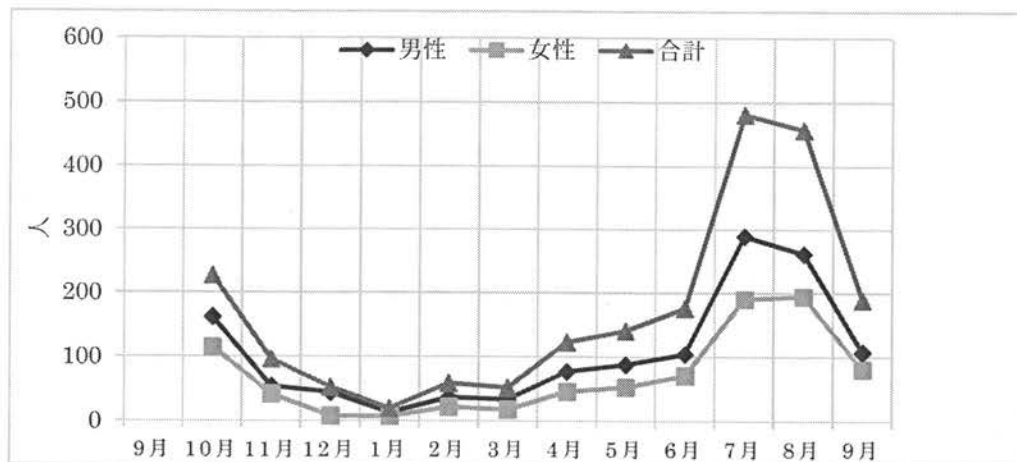


図4 (上) ②舞子公園砂浜の利用者数と(下)その風景(2014年1月18日撮影)。

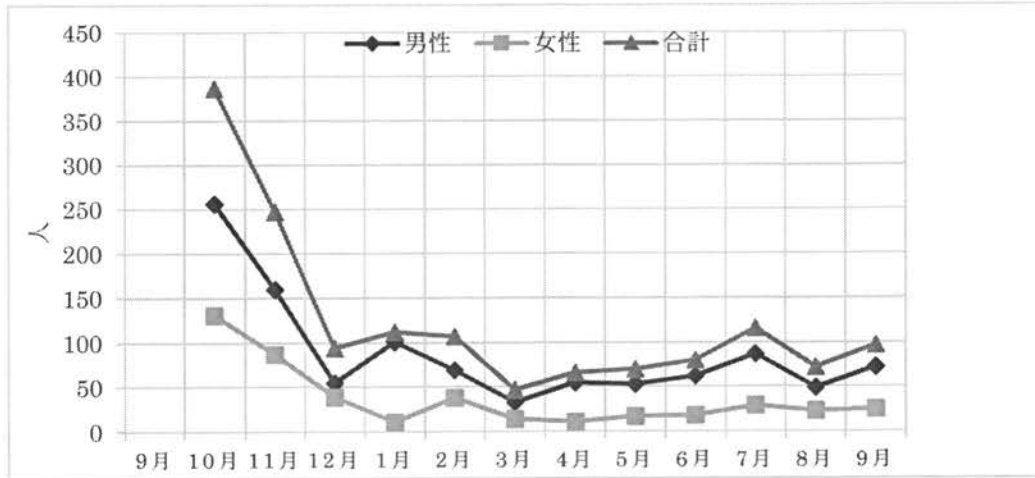


図5 (上) ③舞子公園堤防の利用者数と(下)その風景(2014年2月9日撮影)。



図6 枠は、右から④大蔵海岸砂浜、⑤大蔵海岸堤防、⑥明石港を示す。

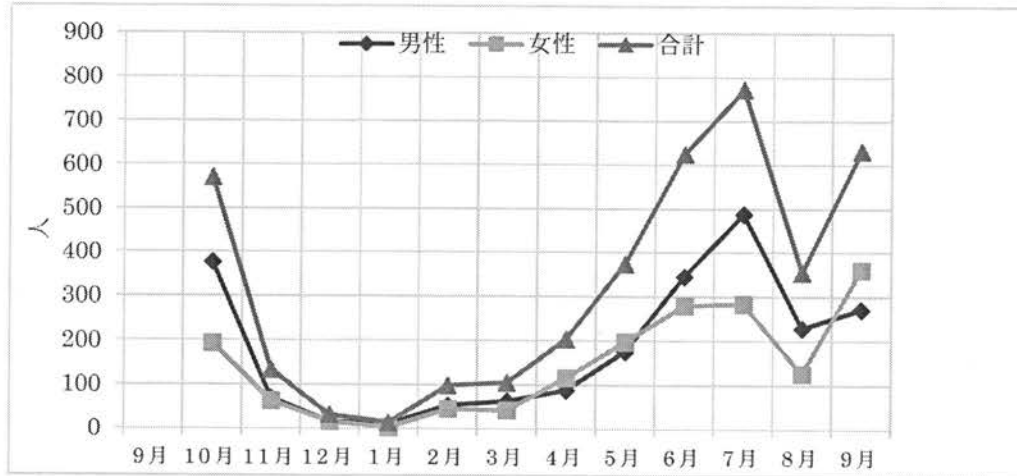


図7 (上) ④大蔵海岸砂浜の利用者数と (下) その風景 (2013年12月15日撮影)。

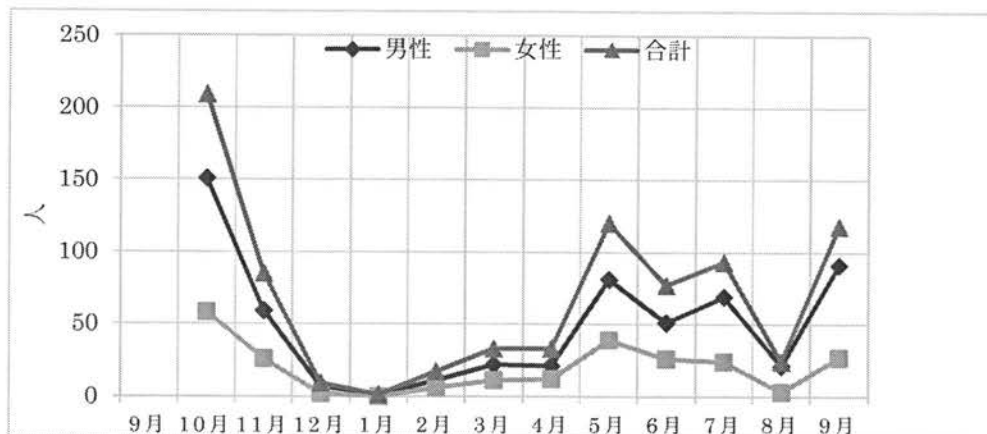


図8 (上) ⑤大蔵海岸堤防の利用者数と (下) その風景 (2013年10月13日撮影)。

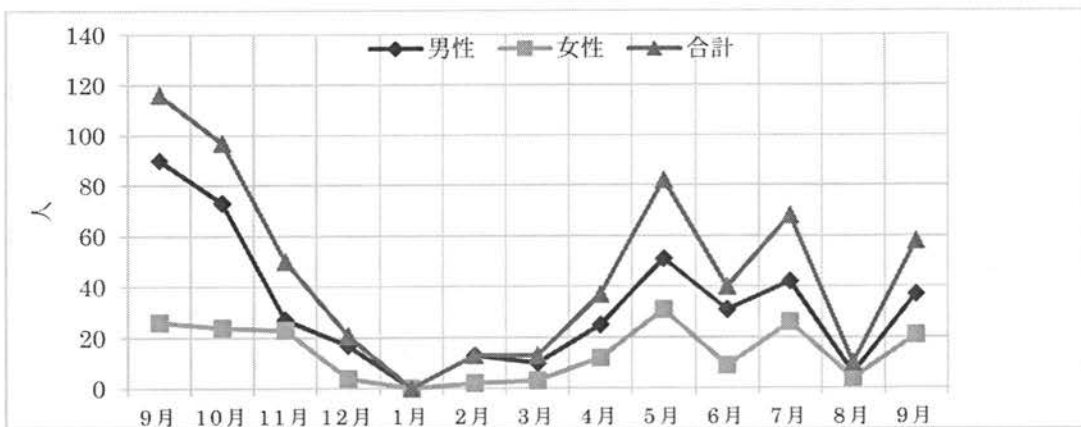


図9 (上) ⑥明石港の利用者数と(下)その風景(2013年10月13日撮影)。



図10 枠は、右から⑦林崎漁港、⑧林崎海岸砂浜を示す。

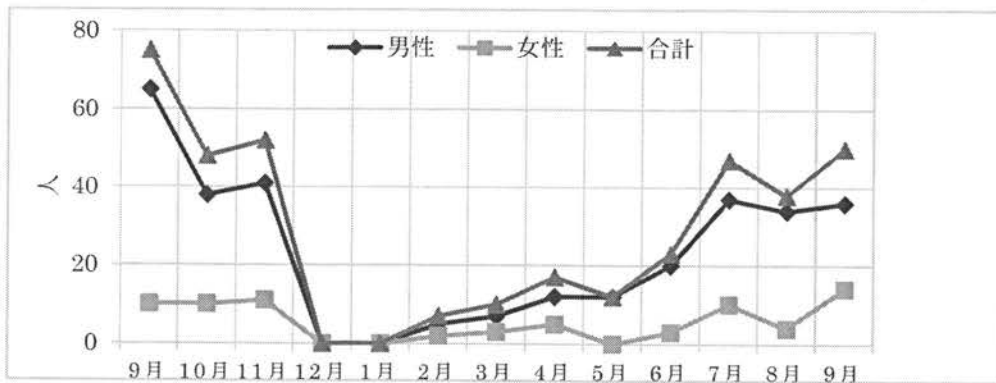


図 11 (上) ⑦林崎漁港の利用者数と(下)その風景(2013年10月13日撮影)。

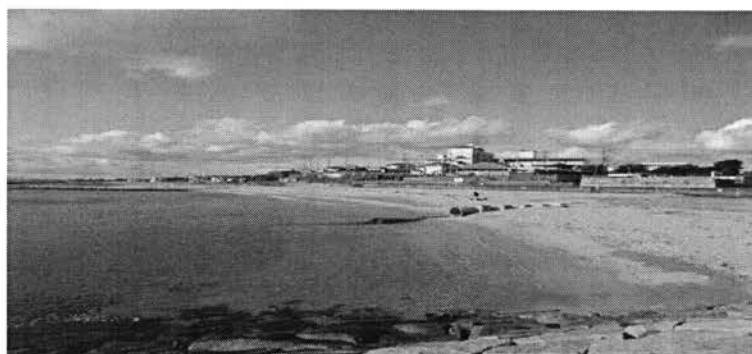
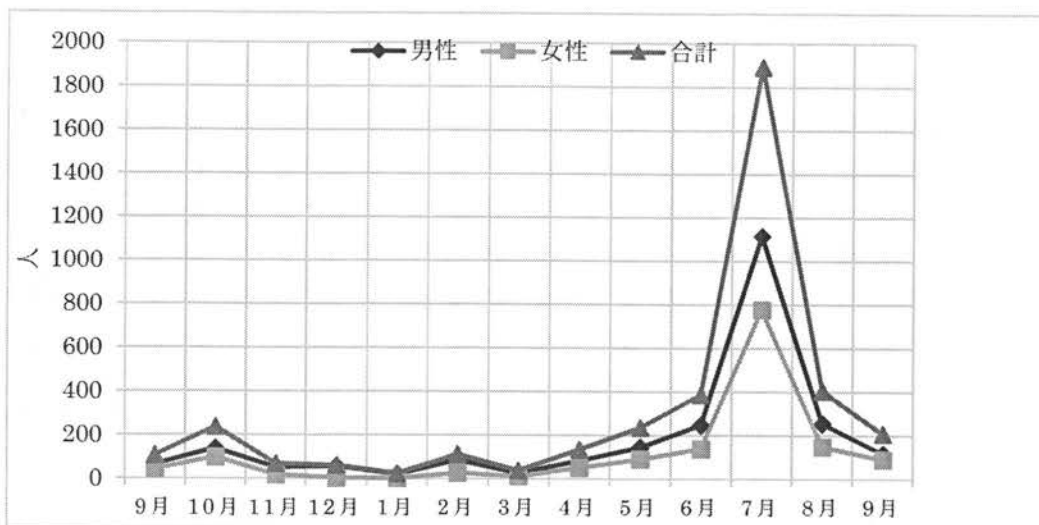


図 12 (上) ⑧林崎海岸砂浜の利用者数と(下)その風景(2014年2月9日撮影)。

4 考察

4.1 砂浜地区と堤防地区の季節変化

砂浜地区の特徴は、砂地であり、海面に対して緩やかな角度がある。堤防地区の特徴は、コンクリートなどで舗装されており、テトラポットなどはあるが海面に対して砂浜よりも急な角度がある。当然、地形や足場などの条件が異なるため、利用目的も違って来る。砂浜は海水浴場やビーチスポーツ会場になり、夏だけに人が多いのであろうが、堤防は釣りや散歩など一年を通して楽しめるレジャーが多いと考えられる。

堤防地区5か所の平均利用者数を「堤防平均」、同じく砂浜地区3か所を「砂浜平均」、同じく全地区8か所を「全平均」として図13に示した。堤防、砂浜を問わず、いずれの調査地も冬期の利用者数は少なかった(表1)。砂浜平均では7月最多1049人と10月第二ピーク345人と1月最少19人で、夏期最大で次に秋期に多いダブルピークの変動を示した。堤防平均では10月最多185人と5~7月第二ピーク50~80人程度と3月最少26人で、秋期最大で次に初夏期に多いダブルピークの変動傾向を示した。また、最大ピークのみに着目すると、砂浜地区は人間が主体のため日射・気温が共に高い7月に、堤防地区は魚が主体のため、その数か月後の海水温の最も高い9月頃に最大ピークが来ているとも解釈できる(気象庁、2014/9)。全平均では7月最多441人と10月第二ピーク254人と1月最少23人で、砂浜平均と同じく夏期最大で次に秋期に多いダブルピークの変動を示した。砂浜地区のほうが広面積である影響もあってかピーク時には堤防地区よりも人数規模が大きかったために、全平均には砂浜地区の影響が大きく出ている。

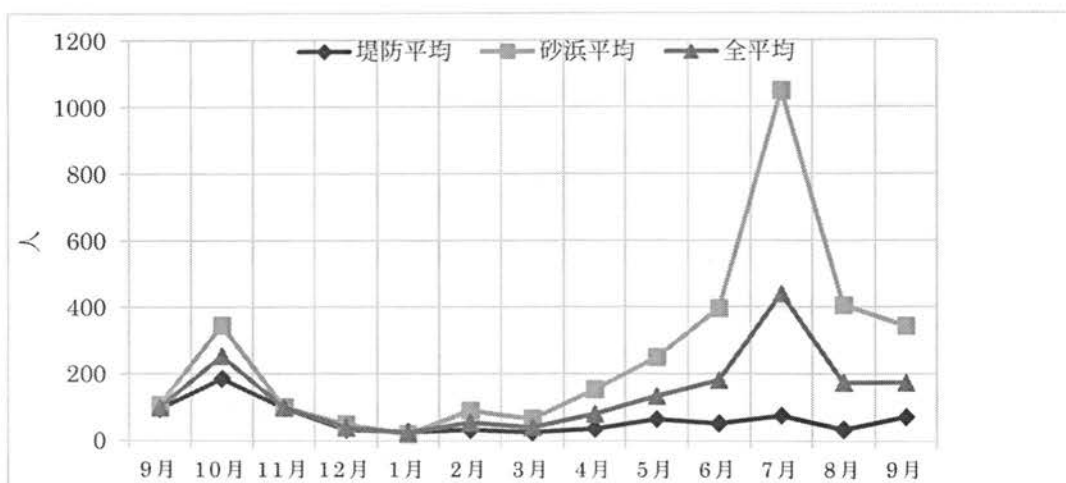


図13 海岸利用者数の砂浜平均(■)、堤防平均(◆)、全平均(▲)を示す。

4.2 砂浜地区の季節変化の原因

砂浜の利用者数は3月から4月の間に舞子公園砂浜と大蔵海岸砂浜は約2倍、林崎海岸

砂浜は約3倍に増加し、砂浜の最盛期である7月まで増加し続けている(図4、7、12)。その後は利用者数が減少し、11月を境に利用者が10月の3分の1程度まで減少していた。月平均気温が10数℃になる4月から増加し出し、同じく10数℃になる11月に減少し出す傾向があった。7月の最大時をはじめ、主には海水浴客の増減による。秋期の第二ピークは次にあげるスポーツなどのイベントの影響が考えられる。

大蔵海岸砂浜の2014年9月調査日(2014年9月21日)は男性272名、女性361名と前の月より大きく増加していた。この日はフラダンスの大会があり、およそ男性159名、女性246名の大会参加者がいた。この影響が無かったと仮定すると、男性115名、女性113名となり、8月と同水準だった。また、この日は女性のほうが男性よりもかなり多かったことから、十分その影響があったと考えられる。なお、大蔵海岸砂浜には砂浜部分と緑地部分に分けられ、このイベントは緑地部分で行われていた。

同じく大蔵海岸砂浜の10月調査日(2013年10月13日)にはアルティメットの大会が行なわれていた。なお、アルティメット(Ultimate)は、各7人からなる2チームがディスクをパスしながら運び、敵陣内で味方からのパスをキャッチするとポイントとなる競技である(日本アルティメット協会、2015/2)。この大会は砂浜部分で行われていた。この大会の参加者数記録は無いが、2014年9月調査日は砂浜部分113名、緑地部分520名(フラダンス参加者を除くと115名)であったのに対し、当調査日は砂浜部分375名、緑地部分196名と、砂浜部分の割合が多いことから、大会の影響が十分大きかったことが考えられる。

林崎海岸砂浜の2013年9月調査日(2014年9月22日)は2014年9月調査日に比べて利用客が少なかった。この日は福岡でスキムボードの大会が行われていたため(日本スキムボード協会、2014/3)、通常、スキムボード利用者が比較的多い当地区では、そちらに利用客が流れたことが原因の一つと考えられる。次月の10月調査日(2013年10月13日)は利用者数が2014年9月調査日と同水準であった。この日は他地域でスキムボードの大会が予定されていたが中止になっていた。なお、林崎海岸砂浜は日本スキムボード協会のスキムボードポイントに登録されており、2013年9月15日には大会が行われている(日本スキムボード協会、2014/3)。

林崎海岸砂浜の7月調査日(2014年7月20日)は1893名と本調査で最大の利用者数であった。この日は日曜日で翌日は祝日の連休であったこともあり、会社や友人間でのバーベキューの開催予定や報告がfacebook上に多く見られた。全砂浜地区で7月が最も利用者数が多い月になっているのは、砂浜の利用者は海水浴やバーベキューといった比較的体力を使うレジャーを利用目的としているため、釣りなどの比較的体力を使わない利用目的の堤防と異なり、連休による影響をより受けていることも考えられる。

様々なイベント開催時期には、その特性に合わせて必然性があるものの、これらの事例

から見ても月一回の調査ではイベントの影響は大きいため、特にスポーツ・イベント会場になる砂浜などでは利用者数の解釈に注意が必要である。

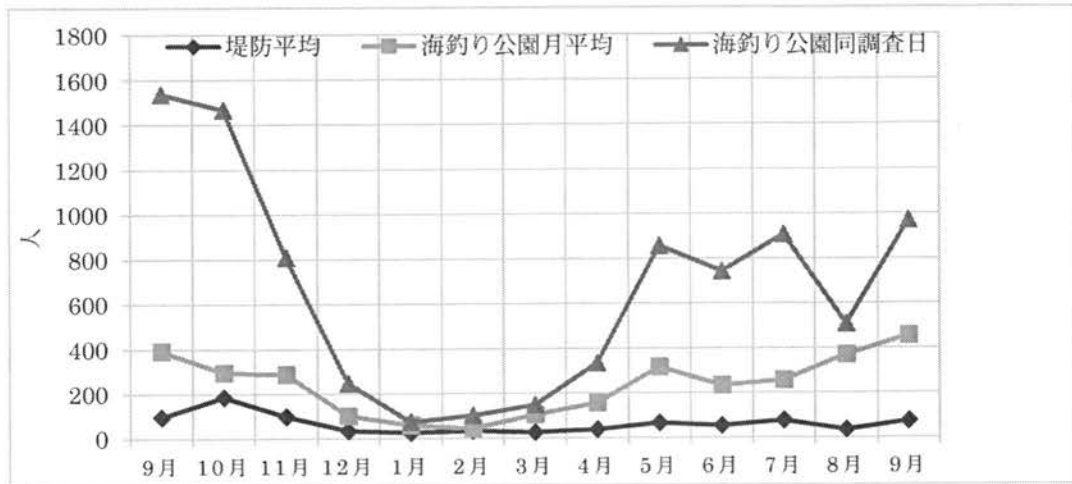


図 14 堤防平均 (◆)、海釣り公園同調査日 (▲)、海釣り公園月平均 (■) の利用者数。

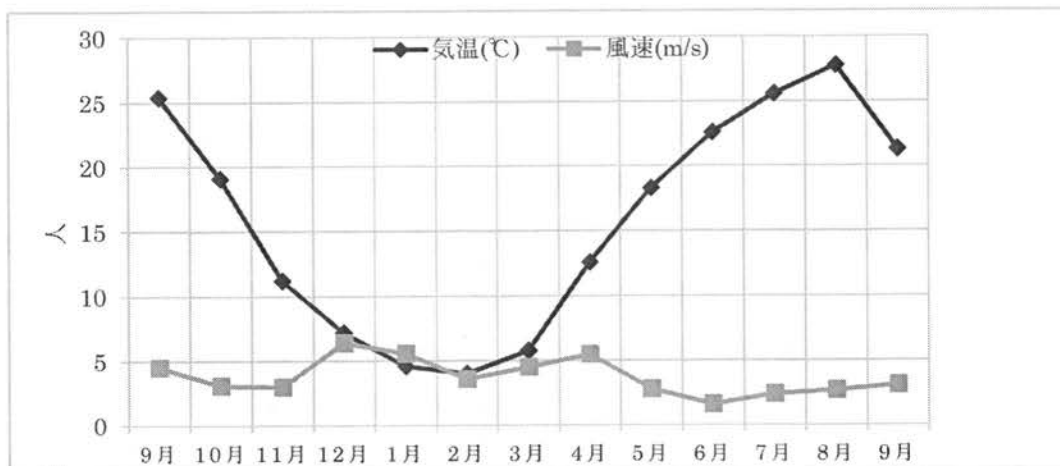


図 15 明石市における調査日の日平均気温 (◆) と日平均風速 (■) (気象庁、2014/9)。

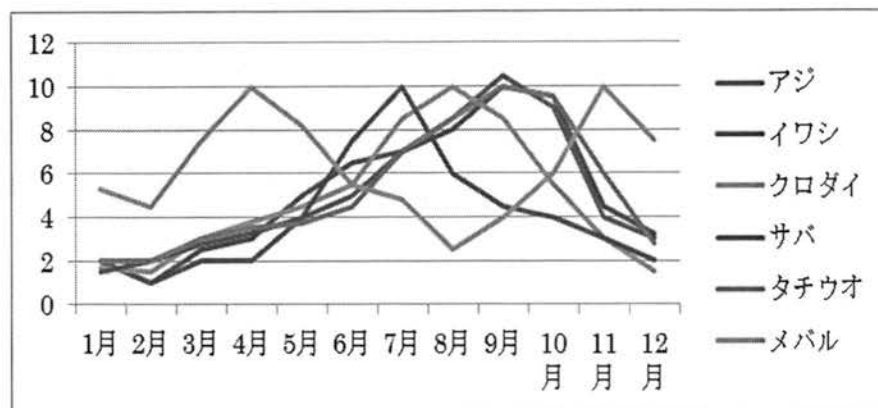


図 16 明石地域の魚種別釣果指標

4.3 堤防地区の季節変化の原因

海釣り公園各月平均と利用者数調査の堤防平均は、8月を除くと似通った傾向が見られる(図14)、このことから利用者数調査は概ね良いデータがとれたのではないかと考えられる。ただし、海釣り公園の2013年の9月と2014年の9月の入場者数に大きな差があったが、これは2013年調査日9月22日が日曜日で翌9月23日は祝日で連休であったのに対し、2014年調査日9月21日は日曜日で翌9月22日は平日であった影響が考えられる。また、2013年9月の調査者数と海釣り公園入場者数の対応が悪いのは、堤防地区は明石港と林崎魚港の2ヶ所でしか調査を行っていないことも原因に考えられる。

釣れる魚種の旬は利用者数に影響する観点から、堤防地区の季節変動を説明するために魚種別漁釣果指標を作成した(2.3節、図16)。当調査地のファミリーフィッシングなどの主な対象魚種にアジとイワシがある。これらは群れで回遊し、群れにあたると数十匹単位で釣れるため初心者や家族釣りに向いており、集客力がある。「サビキ」と呼ばれる一本の釣り糸にエビを模した飾りの付いた針が3~12本付いた釣り糸で釣る方法が一般的である。準備や技術も比較的簡易なものなので初心者や家族釣りなどに向いている。また、アジ、イワシ、サバ、タチウオは回遊の関係から、メバルとクロダイは産卵期と水温の関係から、どの魚種も12~3月頃は釣れにくくなる。なお、当地区でもガシラ(カサゴ)、アイナメなども釣れる魚種であるが、根魚と呼ばれる一年を通してあまり移動せず、そのうえで季節格差がほとんどないためここで魚種別漁釣果指標から除外した。

堤防平均は4月から増加傾向になり、最大ピークは10月であった(図13)。同様に海釣り公園の同調査日と月平均でも9、10月頃に最大ピークが見られた(図14)。ファミリーフィッシングの主な対象であるアジとイワシは9、10月が旬で11月になると釣れにくくなる(図16)。また、アジ、イワシに加えタチウオも同時期に旬が来るサビキで狙いやすい魚であり、人気もある。これらの魚種の影響が季節変動に大きく効いていると考えられる。

堤防平均では8月に7月の半数以下に減少し、9月に倍増して7月と同水準をやや上回るまでに戻っていた。これは海釣り公園同調査日でも同様であった(図14)。この夏期の変動を期待される釣果の観点から考えると、8月はクロダイが最盛の時期であるが、アジ、イワシがまだ最盛の時期より少し早く、サバやメバルが釣れなくなる時期でもある。9月に入るとアジ、イワシ、タチウオが最盛であり、8月より少し落ちるがクロダイもまだ釣れる。5、6月頃から釣りを始めた人が7月に多く集まり、8月は釣れる魚種が減るので少し人数が減り、9月にまた人数が増える、というサイクルになっていると考えられる。

8月調査日は、晴れて気温27.8℃と調査日中最も高く(図15)、堤防地区には日除けになるような物は舞子公園堤防の明石海峡大橋以外は見られず、舞子公園堤防ではタープなどで日陰を作っている利用者も見られた。また、平均風速も2.7 m/sと風もあまり吹いていなかったため、暑さが原因で利用者数が減ったとも考えられる。さらに、堤防利用者が最

も多くなる9、10月は平均気温が約20℃前後で快適であることも利用者が増える一つの原因と考えられる。そのため、堤防でも日よけになる構造物の設置や、夏期にはパラソル等の貸し出しといった対策が効果的であると考えられる。

また、この直前の8月19、20日に、前線の影響で中国地方を中心に、中でも広島市で101 mm/hの観測史上最大の降雨とそれに伴う災害が発生した（PASCO、2014/12）ため、8月調査日頃はアウトドアレジャーを控える機運の高まった時期であったとも考えられる。

4.4 冬期の堤防地区利用者数の変動要因

舞子公園堤防を除く全ての調査地で1月調査日が最少で、特にほぼ利用者のいない堤防地区が目立った（大蔵海岸堤防1人、明石港0人、林崎漁港0人）。日平均気温では2月調査日の4.0℃が最低で、1月調査日の4.6℃の方が高かったものの、1月調査日は日平均風速が5.6 m/sと2月調査日の3.6 m/sよりもかなり強かったことが、1月調査日の利用者数が最少になった理由と考えられる。しかし、舞子公園堤防では2月調査日の方が少なく、垂水漁港では1、2月の差がわずかであった。この2地区に共通する特徴として、背後に風よけになる段差がある（図3、5）。これが影響して風が強くなり気温も低い1月でも、それなりに利用者がいたと考えられる。広い砂浜と違い、堤防は海まで比較的近いので、風よけ構造物の有無は大きい。つまり、このことから風は海岸整備の際に考慮すべき点であり、堤防地区での釣り利用者などを増やすには、風よけになる構造物を造ることは一つの改善手段としてあげられる。

5 まとめと提案

明石周辺の海岸地域は、人口密度が比較的高い割には、東に位置する大阪湾と比較して水がきれいな地域であるため、利用者が多い地域である。更に大都市圏内にあり、海岸沿いに駅が多数あること、国道が通っていることなどから海岸にアクセスしやすい。明石市～垂水区の八つの海岸地区を対象に、海岸沿いの高人口密度地域に適した海岸環境の理想像を提言することを目的として、月一回の海岸利用者数調査を行った。

計5ヶ所の全堤防調査地の平均利用者数は、10月が最多で1月が最少であり、夏から秋にかけて多く、冬に少ない季節変動を示した。平均気温が約20℃前後になる9、10月に堤防利用者が最も多かったことから、快適な気温は利用者の集客にとって大切な要素であるといえる。また、釣果指標と高い相関があった。海釣り公園各月平均利用者数の最大ピークは9月であり、家族釣りの狙いとして期待されるアジ、イワシのピークと重なることから、こちらは集客力のある魚種による影響を受けていると考えられる。

計3ヶ所の全砂浜調査地の平均利用者数は、7月が最多で1月が最少であり、夏に特に多

く、秋から冬にかけて少ない顕著な季節変動を示した。月平均気温が10数℃になる4月から増加し出し、同じく10数℃になる11月に減少し出す傾向があった。砂浜は海水浴場やビーチスポーツなどの催しの会場になるため、気温以外にもBBQ大会やスポーツイベントの有無などの影響を受けて変動すると考えられる。

改善策として、堤防には風よけのための障害物の設置や、日陰になるスペースの設置やパラソルの貸出などが挙げられる。魚の釣れやすい時期や回遊してくる時期の情報が十分に整理されていなかったため、それらの情報が載った手頃なインターネットサイトがあれば初心者の方居も低くなると考えられる。

謝辞

本研究に際して、貴重なデータを提供して頂きました神戸市立平磯海釣り公園の大前章一氏に深謝いたします。また、利用者数調査に御協力いただきました本学学生の西口和廣、青木隆、榎下茄奈、川上翔平に感謝いたします。

参考文献

1. 生態系工学研究会（2009）大阪湾—環境の変遷と創造—、恒星社厚生閣、東京、137頁。
2. Yahoo Japan（閲覧2014年2月）Yahoo!地図、<http://search.yahoo.co.jp/>。
3. 気象庁（閲覧2014年9月）過去の気象データ検索、<http://www.jma.go.jp/jma/>。
4. 鹿島基彦、石井翔太郎、景山卓浩、榎下茄奈（2014）高人口密度地域における理想的な海岸環境モデルの創出 1章 明石港における釣り客を対象とした利用状況調査明石港における釣り客を対象とした利用状況調査、平成24年度研究成果報告書〈地域研究センター明石グループ〉、43—47。
5. 日本スキムボード協会（閲覧2014年3月）一般社団法人日本スキムボード協会トップページ、<http://www.jsa-skim.com/>。
6. 根魚塾（2008）海釣り最強バイブル4熱釣！根魚塾、メディアボーイ、東京、130頁。
7. 小西英人（2011）釣魚1400種図鑑 海水・淡水魚完全見分けガイド（釣り人のための遊遊さかなシリーズ）、エンターブレイン、東京、541頁。
8. 季節別 旬の魚と地域が分かるサイト（閲覧2014年12月）季節別 旬の魚と地域が分かるサイト、<http://www.recipe-pootal.com/>。
9. 太刀魚道場（閲覧2014年12月）太刀魚道場、
<http://www.rapala.co.jp/TOPICS/2013/1106tatiuo/tatiuorapala.html>。
10. ズカンドットコム（閲覧2014年12月）WEB魚図鑑、<http://zukan.com/fish/>。

11. ぼうずコンニャク（閲覧 2014 年 12 月）ぼうずコンニャクの市場魚介類図鑑、
<http://www.zukan-bouz.com/>.
12. PASCO（閲覧 2014 年 12 月）2014 年の災害対応、
http://www.pasco.co.jp/disaster_info/140820/.
13. 日本アルティメット協会（閲覧 2015 年 2 月）概要と歴史、
<http://www.japanultimate.jp/web/index.php/introduction/history>.

淡路島におけるアーティストのパフォーマンス的活動と地域活性化の関係

桑島 伸二

淡路島におけるアーティストと活動と地域との関わりについて、「地域におけるアーティストのパフォーマンス的活動と地域活性化の研究（一淡路島を事例に一）」と題した論文にまとめ、地域活性学会発行の研究論文集「地域活性研究 vol.6」（2014年度版）に投稿した結果、研究ノートとして掲載されることとなった（発行は2015年3月中旬）。内容は下記の通り。

本研究では淡路島で地域に開かれた交流施設を設け活動を続けるアーティスト3事例を取り上げ、それらの活動と地域活性化の関係について比較研究を行った。アート表現の一形態であるパフォーマンスという視点から、アート山大石可久也美術館の美術館を舞台とした「アーティストとボランティアと来館者による群像劇的活動」、アーティストと鑑賞者が共同主体となって、出来事を成す発明工房の「祝祭イベント的活動」。ソーシャル・スケールプチャーとして地域社会を捉え、地域住民とともに取り組むノマド村の「地域おこしの活動」という3事例それぞれの活動の特長を明らかにした。また、アーティストが行なうパフォーマンス的活動に関わることで、日常を異化する作用が働き、地域活性化に必要な「他者のまなざし」が獲得できることを確認した。同時に、共同主体化による創発作用が働き、地域住民みずからが地域活動を起こそうとする気運が高まり、実際の活動へ繋がっている事も確認した。また、「淡路はたらくカタチ研究島」における茂木の取り組みを通じて、アーティストのパフォーマンス的なアプローチが、地域が抱える問題解決へとつながる可能性を見た。さらに、川俣による「ソーシャライズされた表現」の定義を援用し、3事例のパフォーマンス的活動を運動態という視点から「群像劇的モデル」、「祝祭イベント的モデル」、「地域おこしのモデル」という3つのモデルを考案した。

以上、社会から孤立した孤高の中から生まれる美的表現だけがアートではなく、人びとと関わり合いながらひとつの運動態としてなにかを成したり作り上げることもアート表現のひとつであり、まさしくそれが地域活性化であることを検証し、それは現実社会が抱える問題を発見し解決していく可能性があることを確認した。

最後に、地域住民や行政は、地域に根を下ろし人びとを巻き込みながらパフォーマンス的な活動をおこなうアーティストを再評価し、地域活性化に向けて積極的に連携を取るべきであると提言した。

「越劇の理解と普及を通して新たな地域文化を創出するための研究」 2014 年度活動報告

中山 文

公開講演会の開催（神戸学院大学地域研究センター協賛）

テーマ：「台湾の近代大衆娯楽—歌仔戯と『少女歌劇』系芸態」

講師：劉 南芳（国立成功大学・助理教授、立教大学・招聘研究員）

通訳：細井尚子（立教大学教授）参加無料

日時：6月29日（日） 14:00～17:00

場所：神戸学院大学 明石ハウス（大塩邸）

講演内容：

台湾の近代大衆娯楽—歌仔戯「少女歌劇」系芸態

劉南芳(台湾成功大學助理教授)2014/6

(抄訳・中山 文)

一、 初めに

陳澄三は1946年に「拱楽社」歌仔戯劇団を設立した。「少女歌劇団」で有名になったのは、1952年に「定型シナリオ」を使った試験上演以後のことである。インパクトを強めるために、豪華な舞台装置、少女たちの西洋音楽団、歌舞ショーなどを取り入れた。1961年には「録音団」を成立し、演劇学校などで多元的に発展。1960年代末には「拱楽社」が少女歌舞団の基礎となった。

1960年代には日本の松竹歌舞団、東宝歌舞団が相次いで台湾上演を果たし、非常に人気があった。それ以前の台湾にも「黒猫歌舞団」「芸霞歌舞団」などがあったが、その指導者は作曲家やダンサーだった。拱楽社だけが民間のプロ仔戯劇団を基礎に成立し、演劇的・経済的実力を備えていたので、早期に台湾演劇界に根を張ることができたのだ。

台湾で「歌劇団」というと歌仔戯劇団を指し、「歌舞団」は歌とダンスが主で芝居が従となったものを指す。「拱楽社」は2つの歌舞団をもった。第1団の「中国三蘭歌舞団」と第2団の「拱楽少女歌舞団」だ。第1団には「少女」という文字がないが、団員はすべて15～17歳の少女たちだった。第2団は第1団の海外公演中に稽古をはじめ、台湾で公演も行った。また、第1団の団員たちは3年契約が満了するとすぐに解散し、第2団には一人も参加しなかった。俳優の入れ替わりが非常に早かったことも、拱楽社と他の歌舞団との違いである。

拱楽社は30年間ずっと「少女」編成を特色とした。徹底的な管理で、女優たちは団体生活を送った。勝手な行動は禁止され、みんなで清新で高品質なイメージを追求し、独自のスタイルを打ち立てた。

二、 陳澄三と「拱楽社少女歌劇団」の発展

1. 陳澄三と拱楽社設立当時の台湾演劇背景

陳澄三は1918年台湾雲林県に生まれた。豊かな家庭の長男で、幼少期には故郷の真媽祖廟「拱範宮」で南管戲を習った。この素人劇団は「拱楽社」と名乗り、お祭りで上演をした。当時、大陸の京劇団がしばしば台湾で上演し、陳澄三もにぎやかな武戲に熱中した。こうして、若い陳澄三は演劇事業の道を志すことになった。

1945年以後、台湾民間の歌仔戲に人気が出て、1946年に陳澄三も友人と「拱楽社」という名の歌仔戲劇団を立ち上げた。だが放漫経営で赤字が続き、1947年からは陳澄三が一人で経営を受け持った。劇団に人気俳優錦玉己の一家を抱え、経営は安定した。

当時歌仔戲を上演する芝居小屋はとても多く、チケットを発売し劇場で上演するものを「内台歌仔戲」と呼び、お祭りの際に露天で公演するものは「外台歌仔戲」と呼んだ。通常1劇団の上演期間は十日間で、人気があれば延長した。チケット収入は劇団と劇場の話し合いで分けられた。劇団が多かったために、競争も熾烈を極めた。

内台歌仔戲劇団は毎日2回公演である。1回目は午後2:30-5:00ごろ、2回目は夜7:00-10:00前後だった。「昼の部」であれ「夜の部」であれ、毎日異なる演目を上演した。そのため、劇団は即興表現を生かした「アドリブ」方式を採用し、膨大な公演数をこなした。公演する内容は時代劇やチャンバラなど、様々だった。

「アドリブ劇」は「幕表戲」ともいわれ、上演のはじめに講釈師が登場人物やストーリーを説明し、俳優は台詞や動作を即興で演じた。そのため俳優には豊富な経験や才能が必要とされた。当時の俳優は貧しい家の出身者が多く、彼らは劇団で厳しい訓練を受けてようやく役につくことができたのである。

2. 拱楽少女歌劇団構成の原因と特色

1951年、拱楽社の人気俳優錦玉己が仲間を引っ張り連れて独立した。陳澄三は今後のことを考え、専門の脚本家を雇い入れ、「アドリブ」方式を改革することにした。そうすれば、俳優に即興力を求めずにすむ。思い切って、今はまだ演技の勉強中の少女たちを主役に抜擢するのだ。そうすれば教授陣とトレーニングしただいで、上演のレベルは保障できるだろう。

陳澄三は新しい劇団を「拱楽少女歌劇団」と名付け、フレッシュなイメージを前面に押し出した。当時劇団は劇場を移動するたびに、初演前に衣装をつけた俳優が三輪車の荷台に座って宣伝を行うのが普通だった。陳澄三は若い女優たちに西洋楽器を学ばせ、ユニフォームを着せ楽隊で演奏しながら町を宣伝して歩かせた。この「現代化」はたいへん注目を集めた。

1956年陳澄三は個人出資で台湾語映画を作製し、成功した。同年「アメリカ白雪アイスケーター団」の台湾公演があった。そこではあらかじめ録音しておき、その後でダンサーが口の形をあわせるという方式をとっていた。こうすればダンスをしながら歌うことができる。その録音技術は陳澄三に強烈な印象を残した。1958年に陳澄三は「録音団」を作り、先に全劇をテープに録音し、本番では俳優に口パクをさせる方法を採用した。

1961年に拱楽社第2団が成立した。資本投下のわりに収入が多く、わずか数年のうちに7団まで増設し、うち6チームは少女歌劇団のモデルを踏襲した。この方式はほかのチームにも模倣され、高雄の日光歌劇団も同様の方法で別チームを増設した。

「少女歌劇団」に「録音団」を加えたモデルのおかげで、拱楽社や日光歌劇団は大いに収益を上げた。その成功の秘訣は以下のとおりである。

① 若い女優は管理しやすく、基本賃金も安い

当時の劇団員には大きく2つのタイプがあった。一つは直接に劇団の座長や劇団員に買われて養女になり、一生劇団で暮らす者。もう一つは契約を交わす者である。普通、契約は3年4ヶ月で、この間は劇団で食住を共にする。契約が切れた後も、1年間は無償でお礼奉公をする。契約期間は5年、10年と一様ではなく、契約金と関係した。契約で拘束された少女はコストが少なく済むだけでなく、小さい頃から共同生活のルールが身につけているので、劇団の要求にも従順で、さまざまな改革も滞りなく進めることができた。

② 録音品質と上演時の音響効果品質を重視

陳澄三は脚本と録音の効果に高いレベルを要求し、多額の資金をつぎ込んで研究した。一方、専門の劇作家に台本を書かせ、優秀な俳優を集めて録音した。また録音機器はすべて日本製を使用し、録音時には何度もリハーサルを行い、作品のレベルを保障した。

③ 宣伝方法と舞台効果の重視

陳澄三は宣伝と舞台をどう見せるかの妙を心得ており、宣伝のための楽団、舞台装置、衣装を重視した。

④ トレーニング時間の短縮と、「少女」の外見とパフォーマンスに中心をおく

録音、宣伝、舞台美術などで上演のレベルを保障したので、俳優選択にはビジュアルとスタイルの美しさに重点をおいた。少女たちはこれまでのような厳格な歌唱訓練なしに、舞台上がれるようになり、養成のための時間とコストが大幅に縮小された。

1950年代から60年代中期までが拱楽社のもっとも輝いた時代である。陳澄三は歌仔戲劇団の育成のために1966年に演劇学校を設立し、少女を大量に募集して集中訓練を行った。しかしテレビ局の相次ぐ開局が娯楽事業に大きなショックを与えた。特に内台の商業劇場経営は日増しに困難になった。1968年以後、陳澄三は拱楽社の事業の中心を「少女歌劇」

経営へと転向した。

三、 拱楽社「少女歌舞団」のトレーニングと公演

大型歌舞団の上演は台湾では珍しくはない。1958年に日本から東宝歌舞団が、1967年には松竹歌舞団が來台し、「東京踊り」を上演。日本の歌舞伎、民間音楽舞踊、西洋のバレエ、モダンダンス等を集め、衣装の豪華さがセンセーショナルを巻き起こした。

日本留学の経験を持つアーティストたちが台湾歌舞団の発展を担った。楊三郎は1952年に「黒猫歌舞団」を設立した。林香芸は王振玉・王月霞と1960年代前後に「芸霞歌舞団」を設立し、全省を巡演して非常に人気があった。

1960年代初、訪米した陳澄三はブロードウェイに強い影響を受けた。その後日本で何度も宝塚の公演を観、作品内容や訓練方法を詳細に観察した。1967年に松竹が台湾公演を行うと、スタッフを引き連れて観劇し、1967年に拱楽社の「少女歌舞団」を立ち上げた。

拱楽社は計2回の歌舞団の学生を募集している。「三蘭歌舞団」と「拱楽少女歌舞団」である。両方とも訓練・公演を含めて3年程度、合計6年ほどの活動期間だった。他の歌舞団との違いは、拱楽社は歌舞団を設立する以前に20年以上の劇団経験を持っていたという事だ。また独自の録音設備、演劇学校を備え、経済力も十分に備えていた。「少女歌劇団」を経営した経験が「少女歌舞団」の発展につながっているのである。

1. 少女歌舞団の募集と研修

1968年拱楽社は歌舞団団員の募集を始めた。若い女性であることだけが条件で、写真付きの履歴書で簡単な審査をパスすれば面接を行った。初回は35名が合格した。みな15-18歳で、学歴はほぼ中学卒業、小学校卒業という人もいた。面接では歌と簡単なダンスの試験が行われた。彼女らはもともと工場労働者か店員か車掌か、あるいは学校を卒業したばかりで、正式にダンスや歌の訓練を受けたことのない人がほとんどだった。採用されると3年間の契約を結んだ。トレーニング期間はみな演劇学校に住み込みで、毎日朝はバレエの基本動作、午後はモダンダンス、ジャズダンス、タップダンス、夜は民族舞踊をそれぞれ専門の先生について学んだ。

ダンスの基礎をおよそ半年うけると、正式に芝居作りに入り、配役が決められた。1つのダンスを作るのには約1か月かかり、リハーサル期間はおよそ3か月だった。成果発表時にはメイキャップをして上演し、先生たちが配役を決めた。9か月のトレーニングを終え、ようやく正式な公演の準備に入った。

2. 少女歌舞団の公演内容と舞台美術の特徴

団員の訓練期間中に陳澄三は指導グループを組織した。メンバーはダンスの先生たちだけでなく、演出の邵羅輝、舞台美術と衣装の侯壽峰、照明の許中河らを含んだ。

「黒猫歌舞団」から「芸霞歌舞団」まで、上演はショーと芝居の二部構成だった。拱楽社はもともと歌仔戯劇団なので、芝居については手馴れたものだった。歌舞団の芝居は普通古装戯と現代戯からなる。上演は約1時間50分で、ショーのあとに30分の古装戯と15分の現代戯がついた。もう一つの特徴は舞台美術である。作品内容に合わせてセットも変化させ、衣装にも気を配って視覚効果を狙った。海外公演でも舞台セットは評判を呼び、特にタイで上演した「桂河大橋」の機関車のシーンは舞台転換や爆発の効果音などがリアルでマスコミにも大好評だった。当時の舞台装置は平面的なものが普通だったが、拱楽社は立体効果を強調した。仙境の場面では多層的空間を作り、ドライアイスを使用した。拱楽社歌舞団の団員は訓練期間が短かくて芝居がうまくはなかったので、作品の品質を上げるために舞台効果は大変に重要だった。

3. 拱楽社歌舞団の巡業とその終焉

1970年「三蘭歌舞団」は台北で正式公演を行った。1か月の上演期間で、チケットは500元だった。当時歌仔戯のチケットは50元を超えることはなく、工場労働者の1か月の給料がおよそ600元だった。高額にもかかわらず大人気で、拱楽社の方針変更は初歩的成功をみた。その後台湾各地を巡演し、1971年には香港、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポールなど1年半のツアーを行った。国外にいる間に契約の3年は満了したが、協議の結果、みな帰国までそのまま上演を続けることにした。

「三蘭歌舞団」が国外ツアー中の1972年、拱楽社は台湾で第2団のメンバーを募集した。短い訓練の後台湾で短期的なツアー公演を行い、「三蘭歌舞団」が帰国するや、入れ替わりに海外上演に進出し、1974年に帰国した。

第二期の「拱楽少女歌舞団」帰国後、国内の演劇市場に変化が訪れた。まずテレビ局が3つも開局し、テレビ受信機も徐々に普及したため、劇場で芝居を観る人が減少した。次に観客の減少に伴って、劇場が大劇場から小劇場へ次々と改修されたのである。歌舞団にはかなり大きな演劇空間が必要で、とくに凝った舞台装置にはどうしても大きな空間が必要になる。舞台規模の縮小が大型歌舞団には決定的なマイナス要因となった。

陳澄三は劇場問題解決のために、サーカスのようなテント式や自家ビルの地下に劇場を建築することを考えたが、いずれも失敗した。ついに周囲の反対を押し切り、陳澄三はすべての演劇事業をたたんだ。メンバーによると、活動期間は短く、突然終結した。その後、団員は散り散りばらばらになり、各自の道を歩んだ。

四、まとめ

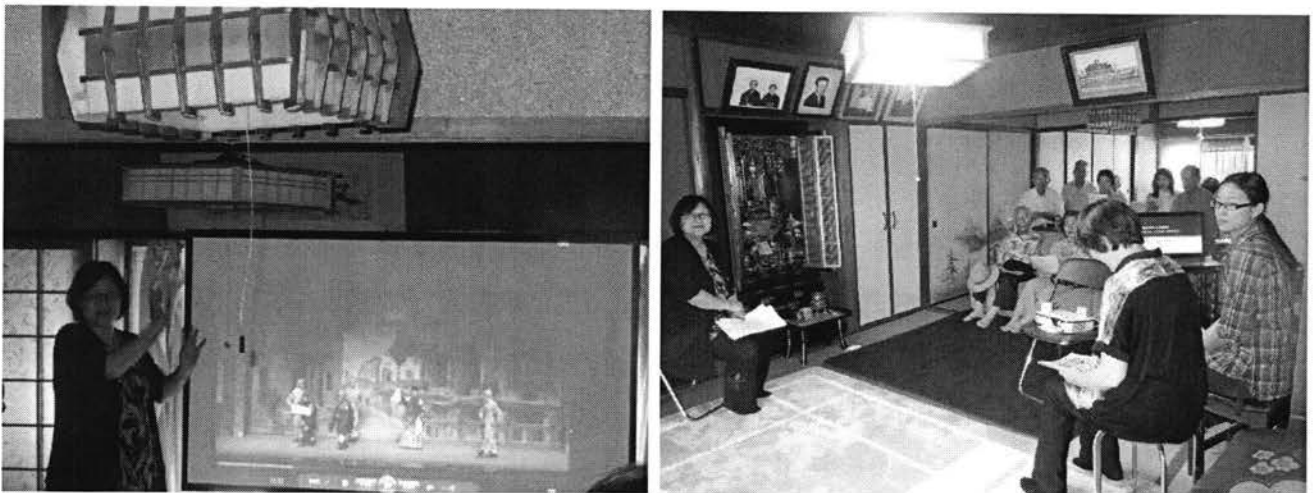
拱楽社は台湾社会が急速に変化する時代に生きた。それは第一に台湾が第二次世界大戦後の農業社会から 1970 年代の興行社会へと転換する時期であった。第二に台湾政府が台湾語や台湾語の番組を厳しく制限し始めた時期であった。

台湾政府の言語政策には、学校では「国語」を話すことと、台湾語番組の時間を減らすことがあった。1972 年に教育部は「閩南語の番組は 1 日 1 時間を超えてはならない」とし、1976 年の「テレビ法」では「放送言語は国語を主とし、方言は順次減少させるべし」とされた。この状況の中で台湾語と台湾語を背景とする文化は隅に追いやられ、原始的な露天舞台に戻って何とか命を長らえたのである。

歴史変遷の中で、拱楽社は徐々に「少女歌劇団」や「少女歌舞団」の名前を捨て去った。1970 年以後はもはや「少女」を標榜することなく、一般的な民間のプロ劇団となり、歌舞団は完全に終結を迎え、今は跡形もない。

台湾歌仔戲は 1990 年代に入り新しい局面を見せている。「復古」的歌舞団の上演が流行し、ここ数年野外舞台での上演数が増加している。だが「少女歌劇団」「少女歌舞団」の今後については、まだもう少し見守る必要がある。

講演会写真



移情閣友の会越劇同好会主催 公開講演会

神戸学院大学地域研究センター協賛

台湾の近代大衆娯楽

— 歌仔戲と「少女歌劇」系芸能 —



日時：2014年6月29日（日）14:00～17:00

場所：明石ハウス（大塩邸）

講師：劉南芳（台湾 成功大学助理教授、立教大学招聘研究員）

通訳：細井尚子（立教大学教授）

参加無料！

明石ハウス（大塩邸）

【バスでお越しの方】

バス停「黒橋」下車 徒歩9分

【電車でお越しの方】

JR「朝霧駅」下車 徒歩15分

山陽電車「大蔵谷駅」下車 5分

【車でお越しの方】

国道2号線の黒橋東交差点を南に曲がり、80mほど進んだ右側にコインパーキングがあります

（1時間100円、当日最大500円）



お問い合わせ：神戸学院大学 中山 文

E-mail fumi@human.kobegakuin.ac.jp

「記憶の中の明石」聞き取りプロジェクト

三田 牧

2013年度より、人類学実習授業にて、「記憶の中の明石」聞き取りプロジェクトを行っている。現在は目に見えないが人々の記憶の中には生きている「明石」を、聞き取りによって引き出し、記録する試みだ。

この授業を受講する学生は、町歩きと、聞き取り調査の両方を経験する。

町歩きでは、明石のボランティアガイドさん（ぶらり子午線ガイド）にご協力いただき、明石の暮らしや歴史について、実際に歩きながら学ぶ。歴史の証人である様々な物（例えば建物や碑、灯台など）にふれながら、明石という土地の経験を大枠で理解するのがねらいである。



聞き取り調査では、明石で育った方々数名を明石ハウスにお招きし、彼らの子ども時代～青年時代について、学生たちが聞き取りを行う。2014年度の聞き取りは、前期5名、後期5名の地元の方のご協力を得た。聞き取り参加学生は前期8人、後期13人であった。

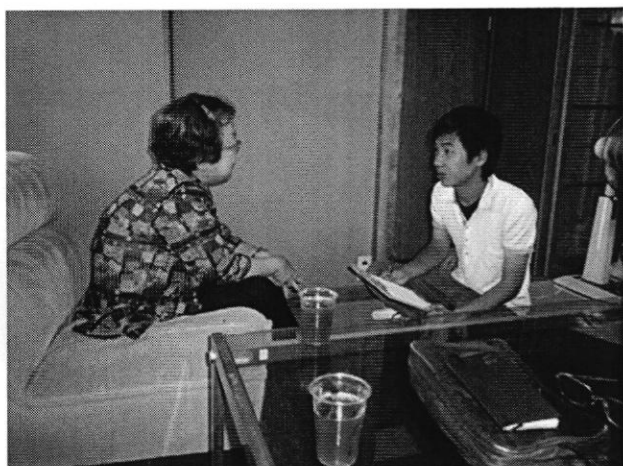
聞き取りは、ある程度のテーマは設定するものの、基本的には話し手（明石の方）と聞き手（学生）の出会いの中で偶発的に形作られていくものである。

学生たちは聞き取りの作法や倫理についてあらかじめ学び、聞き取りの練習をして挑むが、たいていとても緊張している。一方、明石の年配の方々は、（いったい何を話したらよいものやら）と漠とした不安を抱きながら来てくださることが多い。

話者が子ども時代の暮らしぶり、大蔵町の街並み、海の思い出、戦争など、話題は様々だが、きらきらとひかる記憶の断片を、今年も聞き集めることができた。それは、海辺で

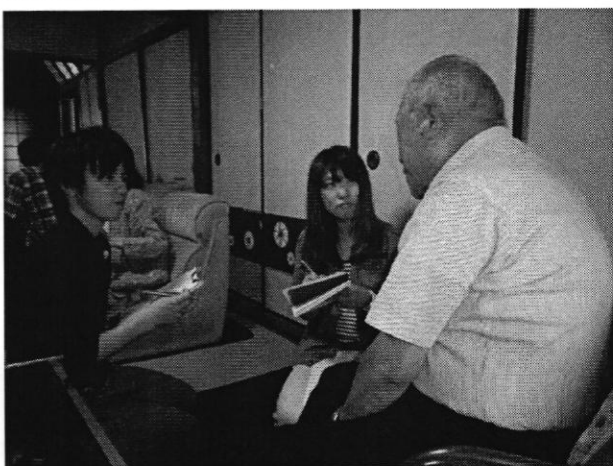
美しい貝殻を拾い集めるのに似ている。

これらの記憶の断片が集積する中で、50～70年前の子どもや青年の視点で見た「明石」の姿がうかびあがってくるだろう。他者の記憶でありながらどこか懐かしい記録群を作成したいと考えている。



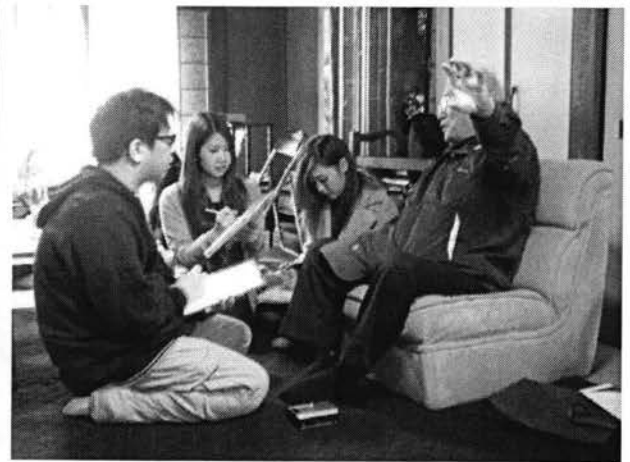
このプロジェクトは、人類学の実習授業であるため、充実した聞き取りをすることを目指してはいるが、むしろ、明石の年配者と神戸学院大の学生という異なる世界に生きる人たちが会うことを大切にしている。

約50年の年齢差は、そのまま人生の蓄積の差でもある。学生にとっては、相手の胸を借りながら、それぞれの人の記憶の中の光景を探していくことになる。聞き取りに際しての学生たちのきわだった真剣さと、相手への共感的態度は、すばらしかった。



調査が終わり、一様に緊張から解放され、口々に感想を述べる中で、「楽しかった！」と言えた学生が何人もいた。人から学ぶ楽しさを体感できたことは、学生にとって大きな収穫である。世界は、学ばば学ぶほどおもしろいのだが、そのことに気づくことが最初の難関なのである。

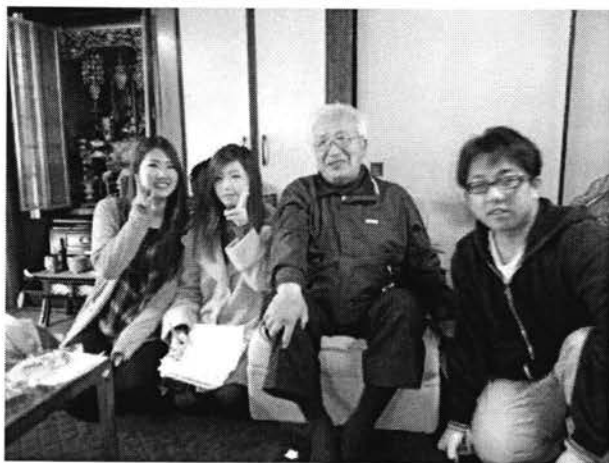
一方、調査に協力して下さった方々も、学生との語らいを楽しんでくださることが少なくなかった。普段話す機会の少ない世代の人間を相手に、みなさん温かく接し、語ってくださり、時には教育的な配慮をしてくださることもあった。そして、お帰りの際には、みなさん、いきいきとしていらっしゃるのである。



この取り組みは二年が終わったところだが、少しずつトピックを変えながら、できるだけ息長く継続していきたいと考えている。

思い出は、地域にとってかけがえのない財産である。それはかしまって権威的な「文化財」とは異なり、私的でささやかだ。しかしある土地に蓄積された私的な記憶こそが、人をその土地につなぎとめている。

個人的な思い出を誰かに語ること。語られた思い出を大切に受け止めること。その往還を祖父母と孫ほどの年齢差のある人々の間で繰り返すことで、「明石」という土地への理解は少しずつ豊かになっていくだろう。



コンクリートの海岸線を眺めながら、その下にかつてあったという砂浜や漁船の姿を想像できること。大学に向かうバスの中で、黒橋の坂道を登りきれないバスを押して歩いた終戦直後の人々の姿が目浮かぶこと。そんな想像力は、明石への共感力を育てていく。

目立たない変化かも知れないが、このような共感を、学生だけでなく明石に関わる多くの人たちに伝染させていくことで、過去の記憶と断絶しない明石の今日的な在り方が模索できるように思う。



大蔵地域における写真撮影を活用したフィールドワーク

矢嶋 巖

1. はじめに

神戸学院大学人文学部人文学科人間と社会コース現代社会領域に属する矢嶋ゼミでは、1・2年次生（以下、回生と表記）のゼミ研究として、伝統的な人々の社会的つながりや文化が未だ色濃く残る明石市の大蔵地域において、地域連携を視野に置いたフィールドワーク学修を実践した。

明石市大蔵地域においては、文部科学省学術フロンティア推進事業研究として、地域研究センター文化人類学分野が、2002年より稲爪神社秋例大祭における参与観察を軸とするフィールドワークを行なってきた。2005年からは映像を用いた地域連携を展開してきた（岩谷・寺嶋・早木・五十嵐 2008）。矢嶋ゼミでは、2011～13年度における文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による地域研究センター明石グループの研究活動の一環として、上記の連携研究の一端を担う形で参画し、具体的にはとくに1回生後期ゼミにおいて、(1)稲爪神社秋例大祭など大蔵地域において行なわれている行事や祭礼における学生自身による写真撮影を活用した参与観察、(2)大蔵地域の事業所への取材、(3)地域環境理解のための大蔵地域の撮り歩きなど、地理学的アプローチに基づくフィールドワークを実施することによる第2セメスター教育のあり方を模索してきた。稲爪神社秋例大祭では、例年では、土曜日（宵宮）に行なわれる2組の獅子舞と早口流しの町回りと宮入、子ども神輿などの宮入、日曜日（本宮）に行なわれる2組の獅子舞の町回り、大蔵八幡町の穂蓼八幡神社から稲爪神社までの神幸行列での献灯やたい・女衆みこし担ぎ、本神輿の撮影を学生に行なわせてきた。撮影結果については、桑島紳二ゼミと合同で作成する冊子『大蔵谷なう。』に掲載するほか、正月や夏祭りに地域研究センター明石グループとして実施する稲爪神社写真展で写真や事業所報告を展示し、地域住民へ報告してきている。

フィールドワークが特定の場所で継続的に実施されることの意義は大きい（矢嶋 2013）。とくに、複数教員による教育のためのフィールドワークでは、地域の情報が教員に共有的に蓄積され、フィールドワークを継続実施するための題材になるなど、さまざまな効用を持つものと考えられる。一方で、フィールドワークがしばしば調査公害を引き起こすことはよく知られていることであり、とくに、調査に慣れていない学生が調査者となる教育におけるフィールドワークは、その危険性が高いと思われる。そして、地域に対して何らかのメリットがなければ、特定の場所でフィールドワークを継続することは困難である。

矢嶋ゼミでは、本年度の地域研究センター明石グループ明石班の研究の一環として人文学会から地域との連携・協働を継続するための実践的研究についての補助を受け、1回生後期ゼミにおける写真撮影を活用したフィールドワークに取り組んだ。以下においては、こ

の取り組みによる学修の実践について振り返り、次年度以降の地域研究センターにおける連携研究に向け、取り組みの意義や実施手法について整理し、課題を見いだす。

なお、稲爪神社秋例大祭の主要行事である神幸行列が、台風接近の予報にともなって中止され、大蔵地域の伝統芸能である大蔵谷獅子舞、早口流しだけが行なわれることとなったため、神幸行列への参加を取り入れられない形での実践となった。また、本年度は2回生後期ゼミにおいて、10月11日に大蔵地域において地域構造理解を念頭に置いたフィールドワークを実施したが、これについては稿を改めたい。

2. 大蔵地域における1回生ゼミによる写真撮影を活用したフィールドワーク実践

(1) デジタル一眼レフカメラ操作の練習

写真撮影を活用した1回生後期ゼミの取り組みについては、2011年度の地域研究センターにおける地域協働研究の開始時より、現代アート研究を専攻する桑島紳二教授と共同で実施してきた。これに当たって、地域研究センターでデジタル一眼レフカメラを20組購入し、学生一人ずつに割り当てて使用させている。演習では、後期開始から稲爪神社秋例大祭に至る3回（年によっては2回）を練習にあてている。PC実習室でゼミを合同実施し、桑島教授の指導のもと、デジタル一眼レフカメラの操作、写真撮影の基本、被写体に対する撮影姿勢など、撮影についての基本的所作を学ぶ授業を実施している。この中では、学生どうしがお互いにモデルになって撮影をしたり、学内を撮影したりするプログラムが盛り込まれており、実践的である。とくに、本年度は桑島教授の発案で、「決定的瞬間」をテーマに学生がキャンパス内において携帯端末で撮影した写真を撮影させてメール添付で提出させる課題を課し、3回目の演習において全ての学生が撮影した写真についての撮影意図などを発表する取り組みを実施した。発表会の進行役は桑島教授が務め、発表の後に聴衆側の学生を指名して具体的な感想を述べさせる取り組みを行なった後に、教員が批評を加えた（写真1）。全ての学生が参加者であり当事者になるという点で、大変有効な取り組みであった。

(2) 稲爪神社秋例大祭における参与観察

1回生後期ゼミである入門演習2では、10月12日夕方からの神幸行列に参加して献灯やたい・女衆みこしを担ぐまでの時間に、2回生のサポートを得ながら、大蔵地域内を回る2組の獅子舞と早口流しの一行

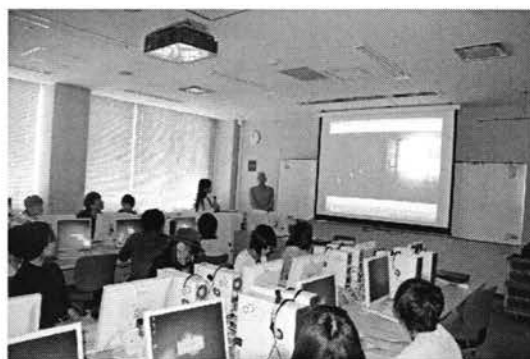


写真1 学生による「決定的瞬間」の発表
2014年10月8日筆者撮影。

への撮影取材を行なうことを予定していた。しかし、上述の通り、神幸行列が中止となったことから、応援参加した3回生によるサポートを得つつ、獅子舞に絞って撮影を実施した。

当日の流れを追うと、まず12日正午に稲爪神社に集合し、16名が参加し、1名が欠席した。また、3回生2名が応援参加したほか、前日の11日のフィールドワークに欠席した2回生2名が参加した。集合時にたまたま稲爪神社の宮司が通りかかり、宮司から学生に対して挨拶を得た。その概要は、大蔵地域での学生による写真撮影が、地域の記録になること、稲爪神社境内で実施している地域研究センターの写真展が好評であること、よって積極的に撮影されたい、という趣旨であった。次に、当日情報を得た大蔵谷西之組獅子舞保存会（以下、西之組と表記する）の町回り開始時刻まで時間が空いたことから、まず、かつての大蔵地域の小売販売の中心的存在であった大蔵市場を撮影した後、西之組の拠点となっている休天神社へ赴き、町回りの準備の様子を撮影した後、同組の大蔵天神町付近における町回りに同行した。次に、情報を得た大蔵谷獅子舞保存会（以下、保存会と表記する）の町回りを追って、明石市の魚の棚商店街へ向かい、そこから桜町界限まで同行撮影をし、15時半に解散した。

大蔵市場は、大蔵地域の公民館である大蔵会館の向かいに位置し、数十店の小売店が連なる小売市場であった。付近は西国街道の宿場町としての大蔵谷の本陣が位置した地でもあり、大蔵地域の中心的な場所であったといえる。しかし、現在は数十の店舗のほとんどがシャッターを閉めたまま、数店だけが営業をしている、いわゆる「シャッター商店街」といわれる景観となっている。そこで、こうした厳しい現状について撮影を通して直接目に触れさせることで、小規模な地域の小売業の厳しい実情を直視させるべく、学生に市場の中で撮影を指示した。

大半の学生が写真を撮影していたが、なかにはほとんど撮影しなかった学生もみられた。この原因としては、そもそも被写体に関心を持たなかったり、寂れた状況を被写体とすることに抵抗を感じたりする学生がいることが考えられる一方で、撮影指示が十分に伝わっていなかった可能性もある。また、見学時点で数店が営業をしていることや、シャッターを閉めていても居住をしていることから、筆者が市場内で詳細に撮影を促す発言をすることも難しかったことも一因しているかもしれない。

西之組の拠点である休天神社では、獅子舞メンバーにより町回りの準備がなされていた。関係者に挨拶と撮影の依頼をしたのち、学生に準備の様子を撮影するように指示した。若い男性たちが黙々と準備する雰囲気呑まれたのか、最初はなかなかカメラを向けない学生が見られたり、遠巻きに撮影していたりする学生がみられたが（写真2）、積極的に踏み込んで撮影するよう指示した。

西之組の町回りでは、参加した学生全員が積極的に撮影に取り組んでいた。ただし、同じ場所で撮影を続けている学生が多く、獅子舞の邪魔にならないようにしながら移動して撮影を続けることを適宜指示した。西之組の主要メンバーには、西明石と明石の魚の棚商店街で八百屋を起業した、2013年度のゼミフィールドワークで取材を依頼したT氏が含まれていて、学生に対して積極的にコミュニケーションを図っ



写真2 西之組の獅子舞の撮影

2014年10月12日筆者撮影。

てくれた。また、獅子舞が通った後に、大蔵天神町の旧西国街道沿いで商店を営む商店主に対して、1名の学生がコミュニケーションを図り、簡単な聞き取りをしていた。

続いて向かった明石市本町の魚の棚商店街では、東側の明石銀座商店街との交差点付近で保存会が獅子舞を演じていた。商店街での演舞の終わりかけで、ダイナミックな店先での獅子舞の撮影には間に合わなかったが、関係者に挨拶と撮影の依頼をしたのち学生に保存会の撮影を指示し、学生はおもに明石銀座商店街で積極的に獅子舞の撮影に挑んだ。学生は積極的に撮影に臨んでいたが、その背景には、大蔵地域よりも撮影条件の点で変化に富んでいることや、西之組の撮影で獅子舞を撮影する際の勘所をつかんだこと、休憩で演舞以外のシチュエーションを撮影できたことがあると考える（写真3）。保存会の町回りが明石銀座商店街を離れ、桜町に入ると、人通りが少なくなった。15時を過ぎてフィールドワークもやや冗長となっていた。料亭の前での大がかりな演舞を見学撮影した後、獅子舞から離れ、ゼミフィールドワークを解散した。



写真3 保存会の獅子と天狗の撮影

2014年10月12日筆者撮影。

解散後、最後まで撮影を続けた学生一人一人に声をかけ、撮影についての感想を尋ねたところ、肯定的な反応があった。なお、スポーツサークルに所属している学生7名が、試合参加のため、フィールドワークから途中で離脱したことを記しておく。

このフィールドワークの後の2度の演習においては、17名の学生を5班に分け、当日撮影した写真の中から各自3枚の写真を選ばせ、撮影意図などを班内で紹介しあう取り組み

を班ごとに行なった。この目的としては、自らが撮影した写真を丁寧に振り返る機会を設けること、自らの撮影結果を相対化する機会を与えること、ゼミ内での学生どうしの交流を図ることにある。2 度目となる 10 月 22 日の演習では、最後に班ごとに代表を選んで一人一人の撮影結果を発表させ、相互交流を図った。

(3) パン製造業者への聞き取り取材

本演習で取り組む事業者への聞き取りについて、今年度は大蔵谷獅子舞保存会の役員で、明石市相生町において親族でパン製造業などを営む M 社の I 氏に依頼し、11 月 23 日(日)に実施した。

実施に当たっては、10 月 17 日に筆者が事業所を訪れて、事前の打ち合わせと下見を行ない、学生に聞き取りの際の質問内容を考えさせるための質問を市場氏に対して行なった。

11 月 12 日の演習において、10 月 22 日までの班から分かれる形で班分けを行なった後、打ち合わせで得た情報を元に筆者がつくっておいた 5 題の聞き取りテーマを示し、各班に選ばせた。

5 題のテーマについては次の通りである。①「パン屋の仕事第 1 班」は、パン屋になった経緯を尋ねること。②「パン屋の仕事第 2 班」は、客商売としてのモットー、商品の調製、商品配置、客商売について尋ねること。③「パン屋の仕事第 3 班」は、日々のスケジュール、仕入れ、仕事のつきあい(取引先)、将来の方向性など、経営について尋ねること。④「プライベート」は、獅子舞・仲間への思い、家族への思いなど、稲爪神社の祭礼との関わりや家族について尋ねること。⑤「将来の夢」は、経営や、稲爪神社の祭礼、家族、自身の夢について尋ねることとした。

これらについて、11 月 19 日のゼミまでに各班で市場氏への質問を検討させた。この際、ゼミ内で質問案の作成状況を報告させる時間を設けるなどし、緊張感を維持させることに努めた。実際には十分な数の質問項目ができない班もあり、適宜巡回してサポートし、各班 10 個程度の質問項目をつくらせ、印刷して、フィールドワーク当日に携行させた。

11 月 23 日のフィールドワークには 17 名が参加した。I 氏への聞き取りは、M 社の給食用ご飯の製造ライン室で行なわれた。上記の①～⑤の順で班ごとに質問を行



写真 4 学生による I 氏への聞き取り
2014 年 11 月 23 日筆者撮影。

なうこととし、全員が代わる代わる質問し、質問役以外の学生が記録や撮影を行なった(写真4)。また、他班の学生はご飯の製造機械を撮影することとしたが、他班の質問が長時間に及び、いささか冗長となった。過半の聞き取りが済んだ段階で、I氏の厚意でI氏が製造したたこ飯を全員でごちそうになった後、パン工場も見学撮影した。

なお、この撮影では、学生が撮影した写真に露出不足による失敗が多数生じた。室内での撮影で露出不足となったことによる。

11月26日の演習からは、聞き取り結果の報告の作成に取り組んだ。休日フィールドワークの代休設定を勘案しつつ、稲爪神社の正月写真展に間に合うように作成させる必要があることから、12月3日の演習時に完成させ、12月10日の演習の当初に演習で発表することを目標にした。まず、班ごとに、班名、報告のレイアウトを検討させ、教員によるチェックと了承を受けた後、具体的な報告作成へ入らせた。短期間での作成を強いるため、今回はレイアウト作成の段階で見本が必要であると感じ、2011～13年度の演習で作成した事業所についての報告をウェブにおいて閲覧可能な状態とし、参考にさせた。

実際の作業は、12月3日の演習時に作業が終わらない班がほとんどで、宿題として作成を指示した。しかし、未完成となることが懸念される班もあったため、12月9日までに矢嶋研究室で筆者による内容のチェックを受けることを義務づけ、最終的に全ての班が完成させた。12月10日のゼミでは、各班の発表結果をモノクロで全員分プリントしたうえで、全ての班員が前に出て、報告内容の発表に当たった。発表では、班名の由来、内容でとくに力を入れた点などを述べさせた。

今回の5題の報告については『大蔵谷なう。』2014年度版(2015年春発刊予定)を参照されたいが、急ごしらえではあったものの、I氏の実直さや熱意がよく伝わる内容となっており、聞き取り調査としては一定の成果を収めたと考える。

(4) 大蔵地域の撮り歩きフィールドワーク

11月30日に、一眼レフカメラを手に大蔵地域を撮り歩くフィールドワークを実施した。このフィールドワークでは、宿場町としての大蔵地域について、表通りのみならず路地裏などを歩いて撮ることで、見逃しがちな場所に気づいたり、地域の本質を感じたりすることを狙っている。また、ハレの日である稲爪神社秋例大祭の神幸行列で歩いた大蔵地域について、あえて日常の日に歩くことで、例大祭の舞台となる場所が持つ意味について考えさせることを狙ってきた。ただし、2014年度の秋例大祭中止により、目的のうち後者の達成が困難であること、当日に中崎まちづくりの会による大蔵海岸清掃イベントが実施されることから、本年度は取材テーマを求めて大蔵海岸で撮影を行ない、明石駅の方向へ歩き、被写体をさがすこととした。

当日は、10時に稲爪神社に集合したが、遅刻した学生がいたために、遅れて出発した。まず、大蔵会館付近へ向かい、これまでのフィールドワークで面識がある鮮魚店店主と話し、被写体になってもらうことを了解してもらって学生に撮影を指示した。鮮魚店では、店主が示す店頭に並ぶ鯛や活魚の鯿に対して学生が興味を示し、数多くの写真が学生により撮られた。

次に、11月12日にも訪れた大蔵市場へ向かい、改めて市場内の撮影を試みるとともに、この時に営業していた喫茶店店主に被写体になってもらうことをその場で依頼し、店内の撮影にも協力してもらった。ここでは、市場内や喫茶店において学生により多数の写真が撮影された。これらのように、地域住民に話しかけて被写体となることを依頼する現場を学生に見せることで、聞き取りと撮影という流れの実際を体験できたものと思われる。

その後、かつて漁村であった海岸側の狭い路地裏を通り、西国街道沿いの表通りとの景観の違いを感じさせてから、大蔵海岸公園へ出た。撮影を予定していた大蔵海岸清掃イベントはほぼ終わっていて、ほとんど撮影できなかった。そこで、4班に分かれて、学生どうしがモデルとなって、大蔵海岸を舞台として演出をした写真を撮影させることとし、うち2班には海岸で撮影することを指示するとともに、残り2班を堤防に誘導して、清掃イベントの解散式を撮影させた後、モデル撮影を行なわせた(写真5)。その結果、学生どうしが十分に打ち解けていないために、学生どうしでモデルを決めることも、演出して撮影することもできない班ができ、教員が指示をして介入せねばならなかった。

大蔵海岸にはトイレと自動販売機が設置されていることから、休憩を取った(11時5分)。15分の休憩の後、大蔵海岸の松林の撮影に臨むこととし、被写体としての松の魅力、クローズアップ撮影や逆光撮影について説明したのち、自由に撮影させたところ、全ての学生が熱心に撮影に取り組んだ(写真6)。

再び大蔵地域の西国街道へ戻ることとし、かつての漁村を通り抜けて、稲爪神社



写真5 学生どうしをモデルとする撮影
2014年11月30日筆者撮影。



写真6 松林での撮影
2014年11月30日筆者撮影。

秋例大祭のフィールドワークを通じて面識ができた喫茶店店主を撮影した後、西国街道に出て、学生には適宜撮影をさせながら、明石駅の方向へ向かってフィールドワークを続けた。大蔵町に位置する伝統的な町家では、外観、とくに虫籠窓について解説を行ない、撮影を促した（写真7）。

大蔵本町では、了解を取って大蔵院の表庭で学生が自由に撮影することができ、数多くの写真が撮影された。大蔵院を出発した時点で既に11時50分であったが、最後に約100年前に夏目漱石が講演をしたことでも知られる中崎町の中崎公会堂に立ち寄り、建物や建設経緯について簡単な解説を行なったところ、同館の管理人から館内見学の声かけを受け、学生全員で中崎公会堂内部を撮影する機会を得、管理人からの解説を受けながら、学生が館内の撮影に挑むことができた。この後、中崎公会堂前で12時30分に解散した。



写真7 伝統的な町家の前での撮影
2014年11月30日筆者撮影。

(5) 正月写真展のための写真選定

地域研究センター明石グループでは、2011年度より、年末から十日戎終了後まで、稲爪神社拝殿前において写真展を開催している。矢嶋ゼミでは、90cm四方のプラスチックパネル2枚に、事業所フィールドワーク報告5枚と、学生が撮影したベストショットを一人一枚ずつ展示している。

12月10日の演習においては、M社の聞き取り結果を発表させた後に、正月写真展で掲示する写真の選定に当たらせた。事前にポータブルハードディスクに取り込んでいた学生の全ての撮影データを、学生ごとにDVD-Rに焼いて演習で配布し、選定させた。交流のため、作業では学生を新たに班分けして取り組ませた。流れとしては、3回のフィールドワークで自らが撮った写真の中から、ベストショットを2枚選定させ、教員の確認を得た後、それぞれにタイトルをつけさせることにした。次に、モノクロ写真という選択肢と例を示し、出力をカラーかモノクロを指定させた。ただし、実際には一人1枚しか掲示できないため、学生に掲示希望順をつけさせることとし、この段階で、教員が写真やタイトルについて可否を判断することとした。最後に、班の中で選定結果を報告し合い、班員のサインを得て提出とした。

なお、学生の意思を尊重しつつも、教員がチェックをすることで誘導し、最終判断をすることを条件としているのは、写真展で展示するのには難がある写真が選定されることを

防ぐためである。また、学生によってつけられるタイトルには、学生がフィールドワークにおける撮影で何を感じ学んだかが、端的に表われる。しかし、タイトルの決定は、長く写真に取り組んでいる人であっても難しいとされることであり、経験的にも多くの学生には容易な作業ではない。適宜巡回し、学生にフィールドワーク時の被写体に対する印象や記憶について、教員が問いを投げ掛けながら、学生がよりよいタイトルを考えるように仕向ける作業が欠かせない。

学生によって選定された写真は、その他の地域研究センターの教員や、他の学生が撮影した写真とともに、地域研究センター備品である高画質プリンターによって印刷され、五十嵐教授、三田准教授、アルバイトの2回生とともに展示準備を行ない、12月25日に稲爪神社に展示した(写真8)。2015年元日の稲爪神社は、気温が下がり、宮司によれば例年より出足が鈍いとのことであったが、写真展を観覧する参拝客が見られた(写真9)。

最後に、学生が何を学び、何を感じたのかを考えるために、学生が最終的に学生によって選定された写真34枚の被写体について検討したい。これらを分類すると、10月12日に撮影された写真が13枚のうち、12枚が獅子舞、1枚がその観客であった。11月30日に撮影された21枚のうち、10枚が大蔵海岸、8枚が街歩き、2枚が中崎公会堂、1枚が大蔵市場を被写体とするものであった。なお、大蔵海岸の写真のうち、清掃活動が2枚、演出写真が1枚であった。学生がモデルとなった演出写真の展示が多いと、稲爪神社写真展で内輪受けの印象を持たれることが懸念されるため、積極的に選ばないように指示していたことを記しておく。

獅子舞が選定された写真の被写体の多くを占めた一方、大蔵地域の撮り歩きで撮影されたスナップ写真も一定の数を占め、町歩きが学生にとって意義あるものであったことが伺える。ただし、秋例大祭が実施された場合には、被写体が格段増えるため、本年度に限って言えることかもしれない。一方、I氏が一枚も選定されなかったことについては、上述の通り、室内撮影での露出不足により手ぶれ



写真8 写真展のための展示作業

2014年12月25日筆者撮影。



写真9 稲爪神社正月写真展の様子

2015年1月1日筆者撮影。

写真が多くなってしまったことが主たる要因と思われる。

(6) 写真コンテスト入賞作品の批評課題

1月の2度の演習では、ウェブで公表されている兵庫県と大阪府で開催されている写真コンテストの入賞作品から、自分が気に入った写真を選定し、批評してコメントをワープロに書いて報告するという課題を行なった。提出前には、班の中で自らが選定した写真とコメントを確認し合う作業を行なった。これについては、学生に対し、社会の現場で見知らぬ人とグループを作り意思疎通をしながら作業をせねばならない状況が多いことを伝え、こうした場の必要性を伝え、モチベーションを下げないように図った。また、取り組み自体の狙いとしては、うまい写真を見ること、撮影結果を発表する場が身近にあることを知ることなどがあった。

さまざまなハイアマチュアの写真を見、選び、いろいろ感じたと思う。こうした取り組みは、この演習の間で行なわれるのが理想的だと思うが、現在の行事や写真展の日程上、演習の最後に配さざるを得ないのが実情である。

3. おわりにかえて

以上のように、2014年度に大蔵地域で実施した、写真撮影を活用した1回生後期のゼミフィールドワークでは、多くの地域の方々に撮影の協力を得つつ、学生が積極的に多種多様な被写体を多数撮影することができ、正月の稲爪神社における地域研究センター写真展に展示する作品の選定とタイトル決定へとつなげた。また、事業所聞き取り調査では、筆者による段取りの後、学生による質問の検討作成、聞き取りの実施、報告の作成、写真展展示による報告ができた。

改めて思うのは、3度のフィールドワークのいずれにおいても、大蔵地域の住民に被写体や聞き取り対象になってもらっていることである。昨今、カメラを向けられることを避ける人が増えてきている中で可能となっているのは、学生を含め、神戸学院大学であるということと断わって撮影をお願いしているうえで、大蔵地域が長い間にわたって人類学分野が撮影をともなう教育フィールドワークを、稲爪神社秋例大祭中心に続けている定点フィールドであること、地域研究センターによる稲爪神社での正月と夏祭りの写真展が認知されるようになってきていることが背景にあるといえる。そして、稲爪神社宮司の発言にもあったとおり、撮影が地域の記録を残し、かつそれが地域住民に認識されていることに意義が見いだせる。今後も継続が必要である。

一方で、地域住民が必要に応じて地域研究センターで蓄積した写真を利用できるよう、アーカイブ化について、条件や手続きの面から今後検討していく必要があるだろう。

なお、今後も撮影をともなうフィールドワークの授業として実施していくに当たっては、いくつかの留意すべき点が生じた。街歩きにおける衰退傾向にあるポイントでの撮影や、室内撮影での失敗については知識として蓄積し、今後のフィールドワークにおいて反映させていく必要がある。スポーツサークルに所属している学生の途中離脱については、他学生のフィールドワーク参加への意欲にも関わることもあり、次年度以降にも生じないように対策をすることが必要である。

ともあれ、今後も撮影をともなうフィールドワークの授業を実施していくためには、定点フィールドとして、地域研究センター教員が大蔵地域においてフィールドワークを継続し、地域住民の理解を得ていくことが大切である。

<文献>

岩谷洋史・寺嶋秀明・早木仁成・五十嵐真子（2008）「映像をもちいた地域との連携についてー人類学的な課題を通じてー」神戸学院大学地域研究センター編集発行『文部科学省 学術フロンティア推進事業 阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究 報告書第 28 号』pp.43-55.

矢嶋 巖（2013）「溜池集中地域におけるゼミフィールドワークと地域との対話」月刊地球 35-2、pp.93-98.

地域連携によるアクティブラーニング授業の実践的研究
神戸学院大学人文学会 2014 年度事業
明石ハウスを拠点とした調査・研究の継続、維持のための活動
研究成果報告書

発行日： 2015 年 3 月 31 日
編集者： 神戸学院大学地域研究センター
発行： 神戸学院大学地域研究センター
〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518
TEL (078) 974-1551 (代)
印刷： 神戸学院大学 ポートアイランドキャンパス印刷室
富士ゼロックス兵庫株式会社
